

# ブルデューなんて、カンタンだ。

鹿児島高校よ、反省せよ？

【現代文化科学の双璧：ブルデューとルーマン】

今日は、いよいよ最後の講義である。

メディア文化論には、一見するとあまり関係しないように見えるかも知れないが、

↓  
今日は、「文化科学の基礎理論」として、

↓  
ブルデューの【文化的再生産論】の入門を話してみたい。

ブルデュー自身は、自分の学問的試みを「文化的再生産論」とは呼んでいないようであるが

↓  
ひとは、ブルデューの理論のことを「文化的再生産論」とよぶことが多い。

なかなかイメージ喚起的なネーミングなので、本講も「文化的再生産論」とよぶことにする。

おいおい、ブルデューの議論が「コミュニケーションと文化」の関係を考えるうえで不可避的な視点であることがわかるだろう。

ブルデューとは、現代フランスで活躍している社会学者である。

↓  
例によって、誇張していえば、

↓  
現代の文化科学・コミュニケーション文化論・社会学理論において、

↓  
「世界」をリードしている【ベスト2】は

↓  
まえに本講でも講じた(ドイツの社会システム論者)「ニコラス・ルーマン」と

↓  
今日紹介する「ピエール・ブルデュー」の二人である。

というわけで、最後の一回ではあるが、なんとかしてブルデューの議論の概略を紹介したい、と考えている。

【お経のようなブルデュー理論をやさしく解説する】

というわけで、ブルデューの解説をするまえに、大体のイメージをつかんでもらうために

↓  
『別冊宝島・社会学・入門』のブルデューについての解説と、ブルデューの主著の一つ『再生産』の「序」をコピーしておいたので、それを見よう。

まえに紹介したルーマンも「お経」のような文章だったが、

↓  
ブルデューくんもそれにおとらず「お経」のような文章ですね。

それに、「解説」もまた、なにをいっているのかよくわからない。

↓  
こういうのを「わかっている人にはわかるけど、わかっている人にはけっしてわからない文」というのでしょうか。

どちらにしても、「同業者」として、「アタシャ恥ずかしいよ」。

でもでも、心配は要らない。

ありがたいことに、ブルデューの発想は、じつは意外に単純である。

ルーマンなんかと比べると格段にわかりやすい。

もっとも、わかりやすいはずのブルデューを、わかりやすく解説した文章をまだ私は見たことがないけど。

というわけで、またまた不肖桜井が、なんとかして、ブルデューをわかりやすく解説してみようというわけだ。

### 【「ハビトゥス」？】

ブルデューがわかりにくいの中には、大きな理由がある。

↓  
それは、人の目をくらますような「専門用語」をブルデューがつかうからなのだ。

でも、一見むずかしいような用語がでてきたときほど、その用語になれてしまえば、「ナア、カンタンだ」となってしまうものである。

ブルデューについてもそれは、言える。

【ハビトゥス】と【プラティーク】という二つの「呪文＝合言葉」さえわかってしまえば、

↓  
ブルデューはもう8割方わかってしまったようなものである。

【「ハビトゥス」＝「慣習の全体」＝(氏より)「育ち」】

まず、ブルデュー理論にとってもっともキーとなる概念(考え方)は「ハビトゥス」である。

「ハビトゥス」とはもともと、ラテン語で(なんでここでラテン語をつかわなけりゃいけないのだろうか?)、「態度・行状・状態・習慣・性質」などを意味する。

ブルデューはこのラテン語をもとにして、彼独特の概念(考え方＝コンセプト)を作った

この「ハビトゥス」について(主著『ディスタンクシオン』の訳者)石井洋二郎は、こう

まとめている。

ハビトゥス：もろもろの性向の体系として、ある階級・集団に特有の行動・知覚様式を生産する規範システム。各行為者のプラティーク（慣習的ふるまい）は、否応なくこれによって一定の方向づけを受け規定されながら、生産されてゆくことになる。

ウーン、「お経のようなブルデュー」の解説なのに、これまた「お経」のような文章ですねえ。

まあ、あんまりむずかしくかんがえなくてもよい。

↓  
ハビトゥスとは、その人その人一人一人がもっている「慣習の全体」のようなものだ。

よく「氏より育ち」というでしょ。

たとえば、「氏」（生まれ）は「上流階級」でも、「貧乏人の家」で育ったりすると、「育ちの悪さ（失礼!）」を隠したつもりでも、フトしたことで、

↓  
「育ちのマズシサ」がばれてしまったりとかするでしょ。スープを音をたてて飲んだり、箸の持ち方が下品だったりとか……。

↓  
よく言う「お里が知れる」というヤツである。

こう言う際の「育ち」をイメージするのが、ブルデューのいう「ハビトゥス」を直観的に理解するにはもっともよいと思う。

【自分では上品なつもりでも、下品に「育って」しまった「私」……】

つまり、人は、とくに意識しないでも、知らず知らずのうちに家庭において、いろいろな「習慣」を習得してしまう。

↓  
ものをどうやって食べるか。箸をどう持つか。言葉をどうしゃべるか（たとえば「方言」!）。身の振る舞い方をどうするか（たとえば、ボクのようにすぐゴロゴロしてしまうかどうか）……

↓  
こういうありとあらゆるものが、家庭における「無意識の教育・学習」において習得され、

↓  
いわば、その人の「人となり」みたいなものをかたちづくっているわけだ。

いくら私と私の妻が「教育」したとしても、私の娘は、私のようにゴロゴロねっ転がって本を読むようになるだろう。

ブルデューのいう「ハビトゥス」とは、いわばこのようにして形成された、その人の「育ち=慣習」の「総体・全体」のことである。

ホラ、意外にカンタンでしょ。

【「プラティーク」もカンタン!】

つぎは「プラティーク」という概念である。

こちらの方は、「ハビトゥス」がわかってしまうえばなおカンタンだ。

まず、石井の解説を引くと

慣習行動(プラティーク)：人が日常生活のあらゆる領域において普段おこなっているさまざまな行動。政治・宗教的活動のように意識的実践から食事、会話、趣味、スポーツ、さらにはちょっとした立ち居振る舞いまで、およそ日頃習慣的におこなっていることのはとんどすべてを包括する広汎な概念。

とある。

プラティークとは、フランス語の辞書を引くと

↓  
「実行」「(いつもの)やり方」「習慣」「(信心の)実践」「勤行(ごんぎょう)」などと出ている。

★上述の「ハビトゥス(習慣の総体)から出力される個々のふるまい」のことを「プラティーク」というわけだ。

#### 【社会学におけるパラダイムチェンジ?】

以上が、ブルデュー理論の二大概念「ハビトゥス」と「プラティーク」である。

意外とカンタンでしょ。

だめおしすれば、「習慣の総体」が「ハビトゥス」で

↓  
「( 個々の ) 習慣的振る舞い」が「プラティーク」である。

と、ここまで書いてきても、みなさんのおおくは「だからどうだっていうの」と思うだろう。

「ベツに、どうてことないジャン」(東京弁?)っていうかもしれない。

しかし、このブルデューの「ハビトゥス」「プラティーク」の概念コンビは、社会学の学説史のなかでは、いわば「画期的な意義」をもっている、といえる(と私は考えている)。

というのも、みなさんにはピンとこないかもしれないが

↓  
いままでの、社会学において、ひとびとの「行為」に着目するさいには、

↓  
「主観的に意味付けられた行為=自覚的行為」に大きな比重がおかれていたからだ。(社会学の古典家のひとり、マックス・ウェーバー以来の伝統による)。

それに対して、ブルデューは逆に

↓

無自覚的な行動＝習慣的な振る舞いにこそ着目するからだ。

↓  
そしてそのための概念装置が「ハビトゥス」「プラティーク」という概念コンビなわけだ。

この意味で、ブルデューの目論見が成功したとすると、それは、

↓  
マックス・ウェーバー以来の「主観的に意味付けられた行為＝自覚的行為」にとくに着目する社会学(これを「理解社会学」いう)という社会学のメインパラダイム(学問の枠組み)に

↓  
変更をせまるものになるのである。

↓  
いわば(ハヤリのコトバでいえば)、ブルデューの社会理論は、社会学の「パラダイム・チェンジ」になりうるのである。

では、ブルデューのこのような「ハビトゥス」「プラティーク」などのあたらしい概念装置の

↓  
「切れ味」「性能」はどのようなものだろうか。

↓  
以下、それをみてみよう。

#### 【排除と選別】

ブルデューの概念装置の切れ味がもっともよく現れているトピックのひとつとして、『再生産』における「排除と選別」の議論をあげることができる。

ブルデューは、フランスの社会において、いかにして「階級(金持ちか貧乏か)」という関係が、「再生産」されるのかについて論じている。

ブルデューによるこのメカニズムは大略こうである。

ブルデューによれば、それぞれの人は、その人の「階級上の位置」(すなわち、金持ちか貧乏か)によって、

↓  
その人は、幼少期に「ハビトゥス」を習得する。

すなわち、階級的な位置が上位のひとはその上位に相応しいハビトゥス(「金持ちにふさわしい身のふるまいかた」)を身につける。

同様に、階級的な位置が「下位」のひとは、「下位」に相応しい「ハビトゥス」(貧乏人にふさわしい身の振る舞い方)を身につける。

そして、この「ハビトゥス」の「違い」が

↓  
その人が入学試験などを受ける際には、「効いて」くるのである。

(フランスにおける)試験の多くは、このような上位者のハビトゥス(金持ちのハビトゥス)に有利なようにできている、とブルデューは考える。

## 【誤認！】

しかも重要なことは、この際、「試験での有利/不利」が、「ハビトゥスの上位/下位」と関係している、と当事者たちは、自覚していないということである。

したがって、【当事者の視点】からすると、試験の勝利者は、「天賦の才」あるいは「本人の努力」のおかげで、

↓  
その試験に合格したようにみえてしまう。

同様に「試験の敗者」も、「育ちが貧乏だから試験に落ちた」のではなくて、「天賦の才」「本人の努力」が不足していたがゆえに試験に落ちたようにみえてしまう。

しかし、ブルデューはいわせれば、これは【誤認】である。

ある者が試験に合格したとしても、それは、彼が習得しているハビトゥスの上位性、ひいてはそのハビトゥスを形成した彼の階級上の上位性（つまりは育ちが金持ちであること）によるのである。

しかし、この点が、当事者たちには自覚されていない。

それゆえ、試験の結果として、彼が階級上の上位（金持ち）の位置を占めてしまうことが、

↓  
「正当化」されてしまうのである。

すなわち、「彼は、親が金持ちで、育ちが恵まれていたから、その大学に合格し、いい会社に入れた」のではなくて、

↓  
「彼自身が『天賦の才』を持ちもしくは『本人が努力』したがゆえに、いい大学に合格し、いい会社に入れた」と見える、わけだ。

↓  
その結果、彼が「いい大学にはいり、いい会社に入る」のは「正しい」ことのように見える（正当化）わけである。

## 【ハビトゥスと選別】

この議論は、おもにフランスを念頭においており、われわれ日本人にはすこしわかりにくいことがあるので

↓  
もうすこし、ことばを補っておこう。

フランスの（とくに「いい」学校の）入試は、日本とは若干ことなるようだ。

フランスでは、日本よりも入試で「面接」や「小論文」が重視されることが多いようだ。

そこでは、面接官と口頭でやりとりして得点を稼ぐことが要求される。

すなわち、そこでは、「たとえ知能が同じだとしても」

↓  
しゃべりかた・書き方・どんなことを話題にするか・どんな本をいままで読んできたか・  
どんな音楽をこれまで聞いてきたか・どんなテレビをこれまでみてきたか・どんな映画を  
これまで見てきたか・どんな絵画をこれまで見てきたか・・・・

↓  
といったことが、成績の「善し悪し」に「効いて」きてしまう。

その結果、「金持ちの子に有利に」試験がはたらいてしまう。

しかし、その「試験」は、「一見すると」と、「公平である」ように、受験者の「学力だけ」をテストしているように、見えてしまう。

↓  
その結果、そのテストの成績は、受験者の「天賦の才」か「努力の程度」を示しているとおもわれてしまう。

↓  
こうして、入学試験の結果が社会的に「正当化」されてしまう、のである。

### 【「誤認」】

このように、「じっさいは、その人の育ちの良し悪しによって成績が左右されるのに、見た目はその人の才能・努力によるように認識してしまうこと」を

↓  
ブルデューは【誤認】のメカニズムという。

### 【文化を介した階級関係の再生産】

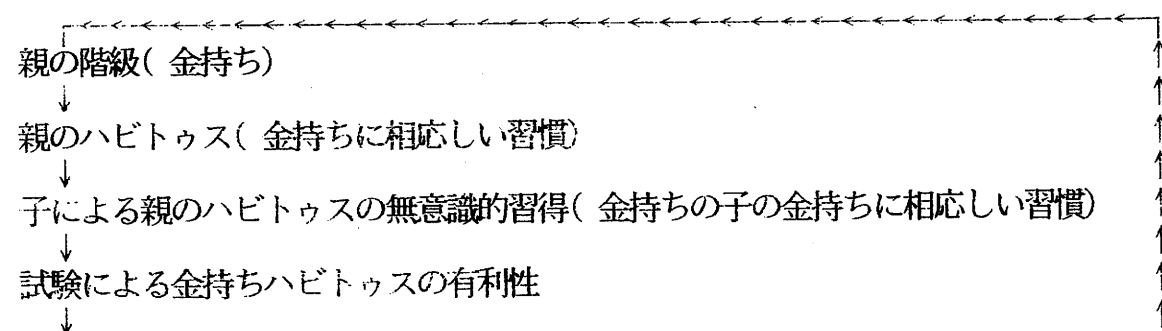
こうして、試験を合格した者の多くは、彼の親と同様に「上位の階級(金持ち)」になっていく蓋然性(見込み)が高くなる。

↓  
そしてそうなるのは、ブルデューにいわせれば、「親のハビトゥスが子に習得され、それが試験に有利に働いたからにすぎない」ためであるが

↓  
はたからみると、その本人に「才能」「努力」があったからだ、と見えてしまう。

↓  
こうして、「文化」を媒介にして、社会の階級関係が「再生産」されるわけである。

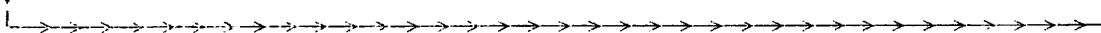
以上を簡単に図示すると以下のようなになるだろう。



しかし、外見上は、「才能」「努力」によるように見える。

↓  
試験の結果の「正当化」（つまりはメカニズムの「誤認」）

↓  
金持ちの子は、金持ちになる。



【あまり「うのみ」にしないこと】

以上がブルデューの議論の概略だ。

実際には、ブルデューは「もっと難解な文体」で、もっと複雑なことをいろいろいっている。

↓

しかし、彼の発想法のエッセンスは以上であれわされていると思う。

また、ブルデューはいろいろな（彼自身の企画による）「統計調査」の結果を引いて自分の見解を「実証」しようとしている。

ただ、彼が実証しようとする事例は多くはフランスの事例である。

たとえば、フランスの事例において、「実証」が成功していたとしても（これも批判的に検討すべき論点だが）

↓

ブルデューの議論が他の事例（たとえば、「日本」）に対しても同様に成り立つかどうかは問題である。

例えば、上述のメカニズムでは、「フランスの試験が口述や小論文を重視する」ことが事柄に影響をあたえていたが、

↓

日本の試験の多くは「ペーパーテスト」重視であるように見える。

↓

だとすると、ブルデューの指摘するメカニズムが日本の試験においた働いているのかは疑問である。

また、別の論点になるが、

↓

現代日本においては、「金持ちの子が金持ちになりやすい」のはむしろ「常識」ではないだろうか。

↓

そこには、なんら「誤認」のメカニズムはないにも関わらず、

↓

いわばそのまま「しょうがなく」社会的に承認されている、と考えることも可能であるかもしれない。

【文化的再生産論とメディア→鹿児島の高校よ反省せよ?!】

このような、ブルデューの視点は、わがメディア論にとって非常に刺激的なヒントを与え



てくれる。

すなわち、各人各人の「ハビトゥス」(の形成)と、その人との「メディア利用」との相関関係、ひいては、それによる「階級関係の再生産」への視点をひらいてくれるからだ。

↓  
と、いってもなんのことかわからないでしょう。説明しよう。

覚えている人もいないかもしれないが、私は、最近【文字階級の再支配仮説】というのを提唱している。

↓  
いろいろと「あたらしいメディア」が喧伝されているが、

↓  
むしろ、これからは、「文字メディア」を「つかいこなせるヤツ」と「つかいこなせないヤツ」とが「分化」し、

↓  
しかも、すくなくともあと150年ぐらいは、「文字メディア」の重要性は無くならず

↓  
その結果「文字を使いこなせるやつ≡支配階級」「文字をつかいこなせないヤツ≡被支配階級」という「階級分化」がしょうじるのではないか、というわけだ。

しかし、ブルデューにいわせれば、その人が「文字をつかいこなせるかどうか」は「その人のハビトゥス(育ち)による」ことになるろう。

つまり、小さいときから文字(本)にしたんしんでいる人は、文字をつかいこなせるだろうし、そうでない人は文字をつかいこなせない。

単純に言えば、「本を読む親の子は本をよむ」→「支配階級になりやすい」し、「本を読まない親の子はよまない」→「被支配階級になりやすい」となるろう。

(実際にはブルデューは「知識人階級」についてもうすこし「精巧な」議論をしている・・・・)

だとすれば、モシ、「鹿児島の高校は受験勉強ばかりさせて、本を読む余裕さえない」とい「俗説」がほんとうだとしたら、

それは、「致命的な失敗」であることなる。

すなわち、たとえ、たとえばT高校から、東京のT大学に進学できたとしても、

↓  
もし、彼が、大学に入るまでに「文字メディア」(本など)にしたんしんでいないとすると、

↓  
彼は、T大において「おいこぼれ」「ついていけず」ひいては「成り上がれない」ことになる蓋然性が高くなるだろう、

ブルデューの本を読んでいると、このように「乏しい文化資本（勉強する余裕）」を「受験勉強へと過度に集中」したかゆえに、

↓  
たとえ「いい学校」に入学できたとしても、

↓  
結局は、その「いい学校」のなかで「おちこぼれる」ような「成り上がりきれない、成り上がり」のハナシがいっぱいでくる。

【結局、私は「成り上がれない」のか？】

このように述べてくると、すでに気づいている人もいるかもしれないが、

↓  
ブルデューの議論はある意味で「悲観的な帰結」を生み出してしまうようにみえるかもしれない。

↓  
すなわち、「貧乏人の子である私は、結局どうあがいても貧乏人だ」というように。

たしかにブルデューの議論からこのような「結局、私は、成り上がれない」という帰結は生じうる。

↓  
しかし、こと我々日本人に関しては、そんなに悲観することはないと思う。

我々日本人はかなりの程度において「結局みんな成り上がり」である。

鳥津の殿様などをのぞけば、今の金持ちの多くは、3～4代まえは貧乏だったりするし、昔の「名家」もいまはおちぶれているかれしれない。

むしろ、上述のように「ハビトゥスをつうじた成り上がり（成り下がり？）ゲーム」にうまく「のって」いくと、

↓  
「成り上がる」し、鹿児島の高校のように(?)「下手な戦略」をとってしまうと、「成り下がって」しまうのだろう。

というわけで、皆さんもできるだけ「成り上がる」ような「ハビトゥス」を習得してください。

「文字階級の再支配仮説」をただしいと思うなら、ぜひ「文字になれたハビトゥス」を身につけてください。